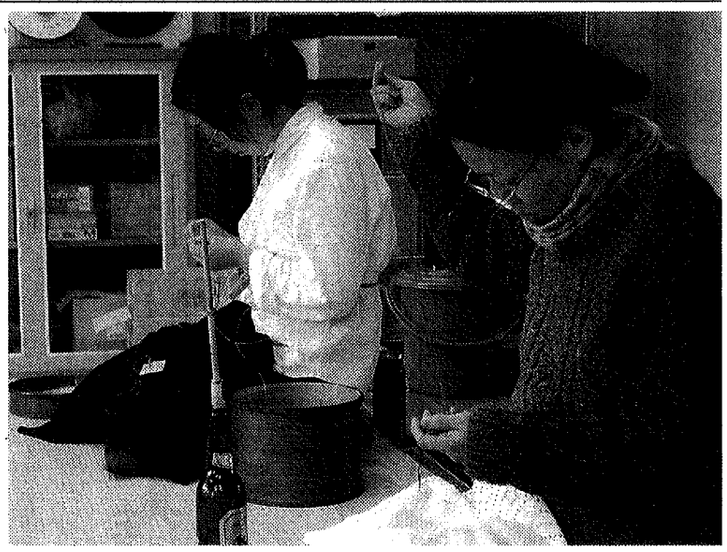


「からむし織」の糸作りの作業に打ち込む体験生＝10月28日、福島県昭和村

査では65歳以上の高齢者の割合が約55％に上り、全国の自治体でも有数の高齢化率だ。10～15年に人口が1割以上減少するなど過疎化も顕著で、村の伝統を受け継ぐ人材の育成が急務となっている。

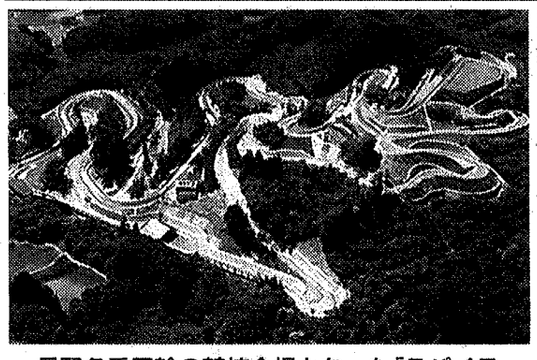
織姫制度ではこれまで日本全国から計110人の体験生を受け入れ、うち約30人が体験期間の終了後も村に住み着いた。村で結婚したのは10人以上に上るという。

村の担当者は「体験制度があることで、住居や仕事といった移住の際の悩みが解決しやすくなる。この制姫制度による移住者は村に新たな息吹をもたらしている。

織姫体験をきっかけとして約10年前に村に移住した神奈川県出身の斎藤環さん(40)は、からむし織の工房兼カフェを数年前から営む。「織姫制度があることで村には移住者受け入れのノウハウが整っている」と斎藤さん。カフェは村民の憩いの場ともなっている。

村の担当者は「他の場所からやってくる織姫さんに、からむし織を受け継ぐ大切さをあらためて教えられた。この制度はぜひ続けていきたい」と話している。

長野五輪ボブスレー会場



長野冬季五輪の競技会場となった「スパイラル」＝長野市（同市提供）

1998年の長野冬季五輪で、ボブスレーとリュージュの競技会場だった長野市の施設「スパイラル」の存続に、黄信号がともっている。老朽化で維持費が膨らむほか、利用者拡大も見込めないことを理由に、長野市が廃止を含めた検討を始めたためだ。競技関係者は「アジアでも貴重な施設。選手を育成できなくなってしまう」と危惧するが、現役選手は国内で約150人にとどまり、一般向けの活用も難航している。

「いったん立ち止まって考えたい」。11月8日に開かれた定例記者会見で、スパイラルの存続に関する質問に加藤久雄市長はこう応じた。

長野市は10月に突然、競技団体や地元住民に対し、2018年の平昌冬季五輪後も存続させるかどうか、来年中に結論を出す考えを示した。加藤市長は直後の会見で「平昌五輪後は稼働う」と発言を後退させたが、波紋が広がっている。

市によるとスパイラルは、ボブスレー、リュージュ、スケルトンの3種類のそり競技が実施できる世界最南端の施設。07年に国の競技別強化拠点施設（NTC）に指定され、平昌五輪の会場完成まではアジアで唯一、国際大会を開催できる。

現在の維持費は年間2億円余りだが、完成から約20年で老朽化が進み、大規模な改修が不可欠となっている。市が今年10月に公表した試算では、平昌五輪後の10年間で、改修費として約10億円が必要。NTCの指定に伴う国の強化事業費がなければ、市の負担は維持費と改修費を合わせて30億

ニッポンの人づくり

哲学する、世界が変わる

＜1＞

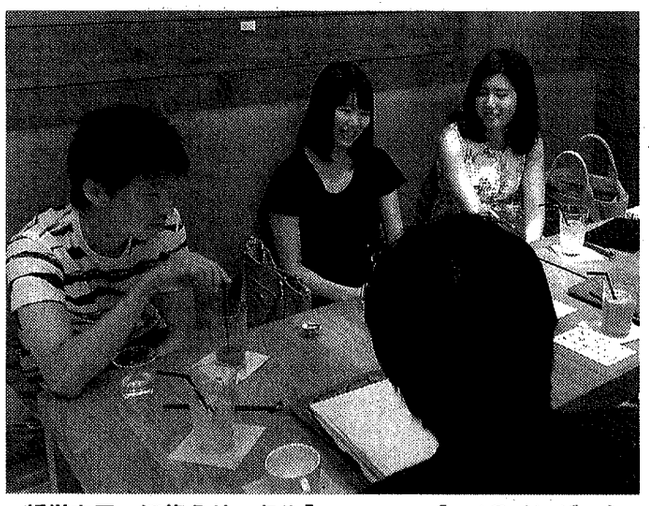
常識疑い、言葉を紡ぐ

不全感抱えカフェへ

社会のとば口に立つ若者に向かって大人は言う。「自分の意見を持ち、主体的に行動しなさい」。でも日本の教育って、そんなふうに子どもたちを育ててきただろうか。正解のない問いに向き合い、「哲学する」ことで子どもたちに考える力や主体性を身に付けてもらおうと、模索を始めた教育現場のいまを追った。

東京・新宿の喫茶店に三々五々集まってきた7、8人の大学生。コーヒーやジュースを注文し、テーブルを囲むと「哲学カフェ」が始まった。話題は、普段なら思い付くこともないような普遍的なテーマ。くつろいだ雰囲気の中で一人一人が言葉を紡ぎ、皆で思考を深めようという活動だ。

国内では2000年ごろから各地で広がり始め、大人から学生まで多くの人が参加する。複数の大学が参加するサークル「onecafe」は14年から活動を始め、週1回程度カフェを開催している。これまでに扱ったテーマは「死の意味とは」「負けの必要性」などで、参加者の顔ぶれも内容によって入れ替わる。



哲学カフェに集うサークル「onecafe」のメンバーたち＝8月、東京・新宿の喫茶店

8月初旬のテーマは「心を許せる境界」。ある学生が「何を言っても許される家族は別だけど、死生観や宗教観はなかなか他人にさらけ出せない」と口火を切ると、隣の学生も「自分もほとんど人に心を許してないと思う」と発言。

すると、また別の学生が「本を読んでいる時は筆者に対していろんな自分をさらけ出している気がする。筆者と対話している感じかな」と新たな視点から意見を述べた。

哲学科の学生もいるが、専攻は国際関係学や医学などさまざま。哲学の素養がなくても参加できるのが魅力だ。話しやすいように一つのグループは4人程度で構成。人の話は途中で遮らずに最後まで聞き、哲学の専門用語はなるべく使わないのがルールとなっている。

「大学の友達とは軽い話題ばかりで、真剣な話ができない」。女子大に通う学生はカフェに来る動機をそう打ち明ける。参加する学生の多くが口にするのは「これまでの人生で、突き詰めて一つのことを考える場がどこにもなかった」という不全感だ。

「大学入試までは、いつもマルバツの正解を押しつけられてきた。それが大学生や社会人になった途端、自分で考えて主体的に行動しろと言われても…」とある学生。

私立大の男子学生は「常識を疑ってもいい。自由に考えて発言してもいいんだって、ここに来て初めて思えるようになった。話が分かり合えない人にも寛容になったと思う」と自己分析した。

onecafe運営委員の会田司さん(21)は哲学カフェが多くの人を引きつける理由をこう語る。「他者との対話を通じて、自らの価値観があぶり出される。自分はなぜそう考え、何を大切にしている人間なのかを見つめ直すことができる」

哲学カフェ　人生や社会に関する本質的な問いについて、対話を通じて参加者が思考を深めていく活動。1992年にフランス・パリの街角で自然発生的に始まったとされる。哲学の専門知識は不要で、誰でも参加することができる。

チェコ製ピアノ

島根の有

明治期の歴史的建造物として知られる松江市の旧医院「田野家住宅」で見つかり、松江城内に置かれて「ノヴィー」という愛称で親しまれているチェコ製ピアノと同じメーカーのものを市民有志らが探している。見つかれば「ノヴィー・ジュニア」と名付け、旧医院に設置したい考えだ。

ノヴィーは2013年に市に寄贈された旧医院に残され、音が出ない状態だった。処分されかけていることを知った市民が「チェコ製ピアノ再生実行委員会」